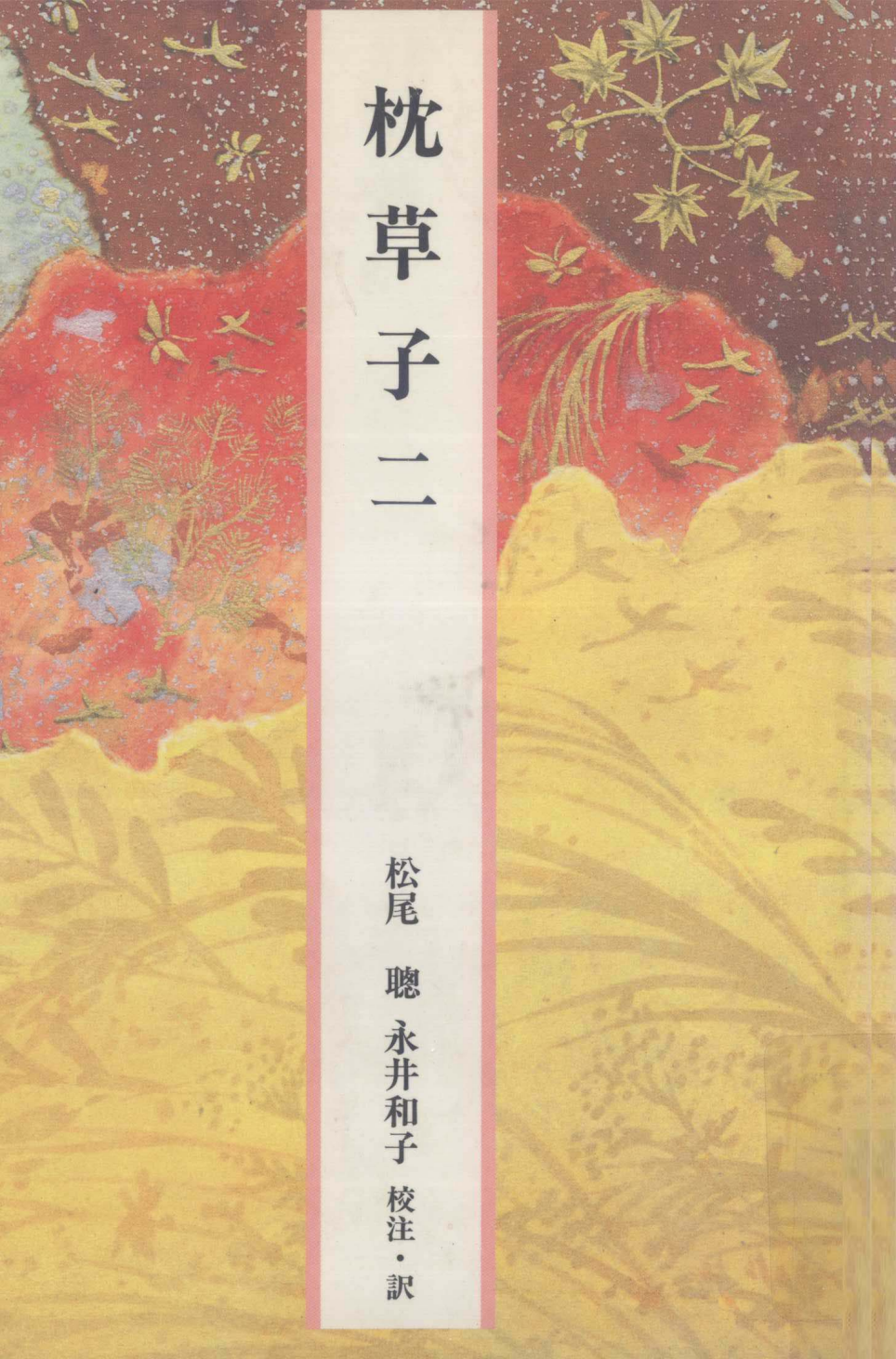




枕草子二

松尾 聰 永井和子 校注・訳



小学館

完訳 日本の古典 第十三巻 枕草子(二)

一九八九年四月一日 初版第二刷発行

校注・訳者 松尾 聰 永井和子

発行者 相賀徹夫

印刷所 図書印刷株式会社

発行所 株式会社 小学館

〒101-01 東京都千代田区一ツ橋二一三一

振替口座 東京八二〇〇番

電話 編集(〇三)二三〇一五一四一 業務(〇三)
二三〇一五三三三 販売(〇三)二三〇一五七三九

・造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたらおとりかえいたします。
・本書の一部あるいは全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。

Printed in Japan

© SMatuo K.Nagai 1984

ISBN4-09-556013-4

(著者検印は省略
いたしました)

72.000-

目次

凡例

二

	原文	現代語訳
一一八 常よりことに聞ゆるもの	一九	三九
一一九 絵にかきておとるもの	一九	三九
一二〇 かきまさりするもの	一九	三九
一二一 冬は	一九	三九
一二二 夏は	二〇	三九
一二三 あはれなるもの	二〇	三九
一二四 正月寺に籠りたるは	三三	四〇
一二五 いみじく心づきなきものは	二七	四四
一二六 わびしげに見ゆるもの	二八	四四
一二七 暑げなるもの	三八	四五
一二八 はづかしきもの	三九	四五
一二九 むとくなるもの	三〇	四六
一三〇 修法は	三一	四六
一三一 はしたなきもの	三一	四六
一三二 関白殿の、黒戸より出でさせたまふとて	三三	四七
一三三 九月ばかり夜一夜降り明かしたる雨の	三四	四八
一三四 七日の若菜を	三五	四九
一三五 二月官の司に	三六	四九
一三六 頭弁の御もとよりとて	三六	四九
一三七 などで官得はじめたる六位筋に	三八	五一
一三八 故殿の御ために、月ごとの十日	三九	五一
一三九 頭弁の、職にまゐりたまひて	四一	五三
一四〇 五月ばかりに、月もなくいと暗き夜	四三	五四

一四一	円融院の御果ての年……………	四五	二五五
一四二	つれづれなるもの……………	四八	二五七
一四三	つれづれなぐさむもの……………	四八	二五七
一四四	とりどころなきもの……………	四八	二五七
一四五	なほ世にめでたきもの 臨時の祭	四九	二五七
一四六	のおまへばかりの事……………	四九	二五七
	故殿などおはしまさで、世ノ中に		
	事出で来……………	五三	二六〇
一四七	正月十日、空いと暗う……………	五七	二六三
一四八	清げなるをのこの、双六を……………	五九	二六四
一四九	碁をやんごとなき人の打つとて……………	五九	二六四
一五〇	おそろしげなるもの……………	六〇	二六四
一五一	清しと見ゆるもの……………	六〇	二六四
一五二	きたなげなるもの……………	六〇	二六四
一五三	いやしげなるもの……………	六一	二六五
一五四	胸つぶるるもの……………	六一	二六五
一五五	うつくしきもの……………	六二	二六五
一五六	人ばへするもの……………	六三	二六六
一五七	名おそろしきもの……………	六四	二六七
一五八	見るにことなる事なきもの、文字		
	に書きてことごとしき……………	六五	二六七
一五九	むつかしげなるもの……………	六五	二六七
一六〇	えせものの所得るをりのこと……………	六六	二六七
一六一	苦しげなるもの……………	六六	二六八
一六二	うらやましきもの……………	六七	二六八
一六三	とくゆかしきもの……………	六九	二六九
一六四	心もとなきもの……………	六九	二六九
一六五	故殿の御服のころ……………	七一	二七一
一六六	宰相中将齊信、宣方の中將と……………	七三	二七三
一六七	昔おぼえて不用なるもの……………	七九	二七六
一六八	たのもしげなきもの……………	八〇	二七六
一六九	読経は 不断経……………	八〇	二七六
一七〇	近くて遠きもの……………	八一	二七六
一七一	遠くて近きもの……………	八一	二七七
一七二	井は……………	八一	二七七
一七三	受領は……………	八一	二七七
一七四	やどりづかさの権の守は……………	八二	二七七
一七五	大夫は……………	八二	二七七

一七六	六位の藏人、思ひかくべき事にも あらず。かうぶり得て……………	八三……………二七七	一九一	寺は……………	二〇……………二六九
一七七	女の一人住む家などは……………	八三……………二七六	一九二	経は……………	二〇……………二六九
一七八	宮仕へ人の里なども……………	八四……………二七八	一九三	文は……………	二〇……………二八九
一七九	雪のいと高くはあらで……………	八五……………二七九	一九四	仏は……………	二〇……………二八九
一八〇	村上の御時、雪のいと高う降りた るを……………	八七……………二八〇	一九五	物語は……………	二〇……………二八九
一八一	みあれの宣旨の、五寸ばかりなる……………	八七……………二八〇	一九六	野は……………	二〇……………二九〇
一八二	宮にはじめてまゐりたるころ……………	八八……………二八一	一九七	陀羅尼は 暁……………	二〇……………二九〇
一八三	したり顔なるもの……………	九四……………二八五	一九八	遊びは 夜……………	二〇……………二九〇
一八四	位こそなほめでたきものにはあれ。 同じ人ながら、大夫の君や、侍従の 君など聞ゆるをりは……………	九五……………二八六	一九九	遊びわざは さまあしけれど……………	二〇……………二九〇
一八五	風は……………	九七……………二八七	二〇〇	舞は……………	二〇……………二九〇
一八六	野分のまたの日こそ……………	九八……………二八七	二〇一	弾き物は……………	二〇……………二九〇
一八七	心にくきもの……………	九九……………二八八	二〇二	笛は……………	二〇……………二九〇
一八八	島は……………	一〇〇……………二八九	二〇三	見るものは……………	二〇……………二九一
一八九	浜は……………	一〇〇……………二八九	二〇四	五月ばかり山里にありく……………	二〇……………二九三
一九〇	浦は……………	一〇〇……………二八九	二〇五	いみじう暑きころ……………	二〇……………二九四
			二〇六	五日の菖蒲の、秋冬過ぐるまで……………	二〇……………二九四
			二〇七	よくたきしめたる薫物の……………	二〇……………二九四
			二〇八	月のいと明かき夜……………	二〇……………二九四
			二〇九	大きにてよきもの……………	二〇……………二九四

二二〇 短くてありぬべきもの……………二二二…二九四

二二一 人の家につきづきしきもの……………二二二…二九五

二二二 物へ行く道に、清げなるをこの……………二二二…二九五

二二三 行幸はめでたきもの……………二二三…二九五

二二四 よろづの事よりも、わびしげなる……………二二三…二九五

車に……………二二三…二九五

二二五 細殿にびんなき人なむ、曉にかさ……………二二五…二九七

ささせて出でけるを……………二二五…二九七

二二六 四条ノ宮におはしますころ……………二二六…二九七

二二七 十月十余日の月いと明かきに……………二二七…二九八

二二八 大藏卿ばかり耳とき人はなし……………二二七…二九八

二二九 硯きたなげに塵ばみ……………二二八…二九八

二二〇 人の硯を引き寄せて……………二二九…二九八

二二一 めづらしと言ふべき事にはあらね……………二二九…二九八

ど、文こそなほ……………二二九…二九八

二二二 河は……………二二〇…三〇〇

二二三 むまやは……………二二二…三〇〇

二二四 岡は……………二二二…三〇〇

二二五 社は……………二二二…三〇〇

二二六 降るものは……………二二五…三〇三

二二七 日は……………二二五…三〇三

二二八 月は……………二二六…三〇三

二二九 星は……………二二六…三〇三

二三〇 雲は……………二二六…三〇三

二三一 さわがしきもの……………二二六…三〇三

二三二 ないがしろなるもの……………二二七…三〇四

二三三 ことばなめげなるもの……………二二七…三〇四

二三四 さかしきもの……………二二七…三〇四

二三五 上達部は……………二二八…三〇四

二三六 君達は……………二二九…三〇四

二三七 法師は……………二二九…三〇五

二三八 女は……………二二九…三〇五

二三九 宮仕へ所は……………二二九…三〇五

二四〇 にくきもの、乳母の男こそあれ……………二三〇…三〇五

二四一 一条院をば今内裏とぞいふ……………二三〇…三〇五

二四二 身をかへたらむ人はかくやあらむ……………二三一…三〇六

と見ゆるものは……………二三一…三〇六

二四三 雪高う降りて、今もなほ降るに……………二二三…三〇六

二四四	細殿の遺戸を押しあけたれば……………	一三三……………三〇七	二六一	単衣は……………	一六二……………三三五
二四五	ただ過ぎに過ぐるもの……………	一三三……………三〇七	二六二	男も女もよろづの事まきりてわろ きもの　ことばの文字あやしく使 ひたるこそあれ……………	一六二……………三三五
二四六	ことに人に知られぬもの……………	一三三……………三〇七			
二四七	五六月の夕がた、青き草を……………	一三三……………三〇七			
二四八	賀茂へ詣づる道に……………	一三四……………三〇七	二六三	下襲は……………	一六三……………三三六
二四九	八月つごもりに、太秦に詣つとて……………	一三五……………三〇八	二六四	扇の骨は……………	一六三……………三三六
二五〇	いみじくきたなきもの……………	一三五……………三〇八	二六五	檜扇は……………	一六四……………三三六
二五一	せめておそろしきもの……………	一三五……………三〇八	二六六	神は……………	一六四……………三三六
二五二	たのもしきもの……………	一三六……………三〇八	二六七	崎は……………	一六五……………三三七
二五三	いみじうしたてて婿取りたるに……………	一三六……………三〇八	二六八	屋は……………	一六五……………三三七
二五四	うれしきもの……………	一三七……………三〇九	二六九	時奏するいみじうをかし……………	一六五……………三三七
二五五	御前に人々あまた、物仰せらるる ついでなどに……………	一四〇……………三二一	二七〇	日のうらうらとある昼つかた……………	一六五……………三三七
二五六	関白殿、二月十日のほどに、法興 院の……………	一四三……………三三三	二七一	成信中将は、入道兵部卿宮の御子 にて……………	一六六……………三三七
二五七	たふとき事……………	一六一……………三三五	二七二	常に文おこする人……………	一七〇……………三三〇
二五八	歌は……………	一六一……………三三五	二七三	ただ朝は、さしもあらざりつる空 の、いと暗うかき曇りて……………	一七二……………三三二
二五九	指貫は……………	一六一……………三三五	二七四	きらきらしきもの……………	一七二……………三三二
二六〇	狩衣は……………	一六一……………三三五	二七五	神のいたく鳴るをりに……………	一七二……………三三二

二七六 坤元録の御屏風こそ、をかしうお

ぼゆる名なれ……………一七三……三三

二七七 方違へなどして、夜深く帰る……………一七三……三三

二七八 雪のいと高く降りたるを、例なら

ず御格子まゐらせて……………一七三……三三

二七九 陰陽師のもとなる童へ……………一七四……三三

二八〇 三月ばかり物忌しにとて……………一七四……三三

二八一 清水に籠りたるころ……………一七六……三三

二八二 十二月二十四日、宮の御仏名の初

夜……………一七六……三四

二八三 宮仕へする人々の出であつまりて……………一七八……三五

二八四 家ひろく清げにて、親族はさらな

り……………一七八……三五

二八五 見ならひするもの……………一七九……三五

二八六 うちとくまじきもの……………一七九……三五

二八七 右衛門尉なる者の、えせなる親を

持たりて……………一八二……三七

二八八 また、小野殿の母上こそは……………一八二……三七

二八九 また、業平が母の宮の……………一八三……三七

二九〇 をかしと思ひし歌などを草子に書

きておきたるに……………一八三……三八

二九一 よろしき男を、下衆女などのめで……………一八三……三八

二九二 大納言殿まゐりて、文の事など奏

したまふに……………一八四……三八

二九三 僧都の君の御乳母、御匣殿とこそ

は……………一八五……三九

二九四 男は、女親亡くなりて、親一人あ

る……………一八七……四〇

二九五 定て僧都に桂なし……………一八八……四一

二九六 まことや、かうやへくだると言ひ

ける人に……………一八八……四一

二九七 ある女房の、遠江の守の子なる人

を語らひてあるが……………一八八……四一

二九八 便なき所にて、人に物を言ひける

に……………一八九……四一

二九九 唐衣は……………一八九……四二

三〇〇 裳は……………一八九……四二

三〇一 織物は……………一九〇……四二

三〇二	紋は……………	一九〇	三四三
三〇三	夏のうは着は……………	一九〇	三四三
三〇四	かたちよき君達の、弾正にておはする……………	一九一	三四二
三〇五	病は……………	一九一	三四三
三〇六	心づきなきもの……………	一九二	三四三
三〇七	宮仕へ人のもとに來などする男の、 そこにて……………	一九三	三四四
三〇八	初瀬に詣でて、局にゐたるに……………	一九四	三四四
三〇九	言ひにくきもの……………	一九五	三四五
三一〇	四位五位は冬。六位は夏……………	一九五	三四五
三一一	品こそ男も女もあらまほしき事な しめれ……………	一九五	三四五
三一二	人の顔にとりつきてよしと見ゆる 所は……………	一九六	三四五
三二三	たくみの物食ふこそ、いとあやし けれ……………	一九六	三四六
三三四	物語をもせよ、昔物語もせよ……………	一九七	三四六
三一五	ある所に、中の君とかや言ひける		
三二六	人のもとに……………	一九七	三四六
三二七	女房のまかり出でまゐりする人の、 車を借りたれば……………	一九八	三四七
三二八	好き好きしくて一人住みする人の 清げなる若き人の、直衣も、うへ の衣も、狩衣もいとよくて……………	一九九	三四七
三二九	前の木立高う、庭ひろき家の……………	二〇〇	三四八
三三〇	見苦しきもの……………	二〇三	三四〇
三三一	物暗うなりて、文字も書かれずな りになり。筆も使ひ果てて、これ を書き果てばや。この草子は、目 に見え心に思ふ事を、人やは見む ずると思ひて……………	二〇四	三五〇
三三二	左中将のいまだ伊勢の守と聞えし 時……………	二〇五	三五二
三三三	わが心にもめでたくも思ふ事を、 人に語り……………	二〇六	三五三
三三四	奥書……………	二〇九	三五四

三卷本系統諸本逸文

一	私たちは……………	二二	三五五	一三	男こそ、なほいとありがたく……………	二七	三五六
二	職におはしますころ……………	二二	三五五	一四	よろづのことよりも情あるこそ……………	二八	三五九
三	原は……………	二二	三五五	一五	人のうへ言ふを腹立つ人こそ……………	二九	三五六
四	〔一本 牛飼はおほきにてといふ次に〕法師は……………	二二	三五五	一六	古代の人の指貫着たるこそ……………	三〇	三六〇
	女は……………	二二	三五五	一七	成信の中將こそ……………	三〇	三六〇
	女の遊びは……………	二三	三五六	一八	左右の衛門の尉を……………	三〇	三六〇
五	いみじう暑き昼中に……………	二三	三五六	一九	〔一本 きよしとみゆるものの次に〕夜まさりするもの……………	三一	三六〇
六	南ならずは……………	二三	三五六	二〇	ひかげにおとるもの……………	三一	三六一
七	大路近なる所にて聞けば……………	二四	三五六	二一	聞きにくきもの……………	三一	三六一
八	森は……………	二五	三五七	二二	文字に書きてあるやうあらめど心得ぬもの……………	三一	三六一
九	九月二十日あまりのほど……………	二五	三五七	二三	下の心かまへてわろくてきよげに見ゆるもの……………	三一	三六一
一〇	清水などにまゐりて、坂もとのぼるほど……………	二六	三五七	二四	女のうは着は……………	三一	三六一
一一	〔一本 心にくきもの下〕夜居にまゐりたる僧を……………	二六	三五七	二五	汗衫は……………	三一	三六一
一二	世ノ中になほいと心憂きものは……………	二六	三五八	二六	薄様色紙は……………	三一	三六一
				二七	硯の箱は……………	三一	三六三
				二八	筆は……………	三一	三六三

二九 墨は……………三四…三六三

三〇 貝は……………三四…三六三

三一 櫛の箱は……………三四…三六三

三二 鏡は……………三四…三六三

三三 蒔絵は……………三五…三六三

三四 火桶は……………三五…三六三

三五 夏のしつらひは……………三五…三六三

三六 冬のしつらひは……………三五…三六三

三七 畳は……………三五…三六三

三八 檳榔毛は……………三六…三六三

三九 荒れたる家の蓬ふかく、葎はひた
る庭に……………三六…三六三

校訂付記……………三六三

図 録……………三六五

四〇 「又一本」

霧は……………三七…三六三

出で湯は……………三七…三六三

陀羅尼は……………三七…三六三

時は……………三七…三六三

下簾は……………三七…三六三

目もあやなるもの……………三七…三六三

めでたきものの人の名につきてい
ふかひなくきこゆる……………三七…三六三

見るかひなきもの……………三八…三六四

まづしげなるもの……………三八…三六四

本意なきもの……………三八…三六四

……………三六三

……………三六五

目次

葉月物語繪卷	1
枕草子繪卷	2
住吉物語繪卷	4

〈装丁〉

中野
博之

凡 例

一、本書の底本には学習院大学蔵三条西家旧蔵の室町時代の書写本を用いた。「能因が本」を写したとする奥書があるのに拠って通称「能因本」といわれる。近世から昭和十年代まで広く行われた北村季吟（二三四～二七五）の著『枕草子春曙抄』の本文の源をなす本である。『春曙抄』の本文が、能因本の本文に、三巻本などを参考にして、みだりに変改の手を加えた不純本であるのにくらべて、この本は純粋度が高い本文を保持しているが、それまでの伝写の間に、やや粗雑な書写を経過したことがあったらしくて、魯魚章草の誤りや脱字なども少なくはないようである。従って、それらの事情によって生ずる意味不通の箇所などについては、ほぼ確実と考えられる範囲内で、他の若干の伝本に拠り、またきわめて稀には意によって推測して、最小限度の校訂を試みた。

一、学習院大学蔵三条西家旧蔵本（以下「底本」と称する）の校訂に用いた伝本は次のとおりであり、すべて田中重太郎氏編著『校本枕冊子』（古典文庫刊）掲載のものに拠った。

1 能因本系統

イ 吉田幸一氏蔵富岡家旧蔵本

ロ 高野辰之氏（斑山文庫）旧蔵本〔上巻欠〕

ハ 十行古活字本

二 十二行古活字本

ホ 十三行古活字本

2 三卷本系統

田中氏の校本において底本文の右側に対校に用いてその異同を掲出してある本文。

田中氏は三卷本の第一類本のうち陽明文庫蔵（墨付一六七丁）本を対校用本とされたが、第一類本は、日本古典文学大系本（三卷本）の段序で第七九段の「あぢきなきもの」までの部分を欠いているので、その部分の諸段および、それ以後の段でも第一類本になくて第二類本にある数段は、第二類本の田中氏蔵弥富破摩雄氏旧蔵本をもって補われた。便宜上、それをおしなべて「三卷本」として本書の「脚注」では掲げておいたが、能因本と三卷本とでは段序にちがいがあから、本書の段のうちの段の対校に用いられているのが弥富本であるかを明らかにするため、それに当る本書の段序を次に掲げる。

第一～二五段。第二八～五三段。第五五～六〇段。第六二～八一段（八一段は「あぢきなきもの」の段）。
 第一七三段。第二二二段。第二九五段（この段は弥富本では本書第一〇段の末に当る部分にはいる）。第三〇四段（この段は弥富本では本書第五二段の末に当る部分にはいる）。

右以外の各段は陽明文庫本であるが、ただ次の諸段は、第一、二類を通じて三卷本には全く欠けている段である。

第五四・六一・八二・八四・一一七・一五二・二一九～二二一・三〇三・三一〇・三一一・三一二・三一四・三一八・三二三段。

3 前田家本

能因本にあって前田家本にはない段は次の諸段である。

第六・七・一〇・五七・五八・八〇・八四・八六・八八・九〇・九一・九七・九九・一〇七・一一三・一一六・一二五（ただし三〇六段の末に当る部分に類似の文がある）・一三一（この段の「八幡の行幸のかへらせたまふに」以下を欠く）・一三四・一四〇・一四六・一六五・一六六・一八〇・一八一・二一三・二一五・二一八・二四八・二四九・二五三・二七〇・二七九・二八二・二八九・二九〇・二九五・三〇八・三一四・三一六・三一八・三二一・三二三段。

塚本系統本は不純本文と認められるので、原則としては、いっさい採らない。

一、本書の本文は底本の能因本を、最大限度あるがままの姿で活字化することを心がけたが、読解の便宜のために、次に掲げるような操作を加えた。

1 章段を分け、章段には、底本原本には本来ない「見出し語」を付けた。その章段の分け方、見出し語の付け方は、いっさい、『校本枕冊子』に拠った（ただし、第二六一・二七六段だけは改めた。その段を参照されたい）。

2 章段の中では、適宜段落を分けて改行した。

3 句読点を切り、濁点を加え、会話や消息（手紙の文）の部分で「」でくくった。また、心内語や引歌についてもそのままでは紛れやすく読みにくいと思われるような場合は、「」でくくった。

4 本文表記については、次のように変改を加えたところがある。

イ 仮名づかいを歴史的仮名づかに統一した（ただし意に疑いのある本文については、なるべくもとのままにした）。

ロ 助動詞「ん」「なん」「けん」「らん」などは、原則として、それぞれ「む」「なむ」「けむ」「らむ」などに改めた（ただしもとのままの形を示すほうがよいと判断される場合は、そのままにした）。

ハ 撥音表記は、原則として「ん」を用いたが、「やむ」ことなし」など、原文の表記のままとしたものもある。

ニ 「なめり」「ためり」「ななり」「べかめり」などは、それぞれ「なシめり」「たシめり」「なシなり」「べかシめり」などのように、読みのための「シ」を加えた。

ホ 漢字書きの語を仮名書きに改めたり、仮名書きの語を漢字書きに改めたりしたものがある。なお、意の疑わしい仮名書きの語を漢字書きに改めた場合は、それにふった仮名は、底本文のままにして、仮名づかいを変えることなどはしなかった。

ヘ 底本文に本来ある漢字にせよ、底本文では仮名書きであるものを本書で書き改めた漢字にせよ、読みにくいと思われるものや、読み誤られるおそれのあるものに対しては、なるべく仮名をふった。ただし、読み方が幾通りか考えられる底本の漢字については、一応、穏当と考えられるふり仮名をつけた場合と、あえてふり仮名をひかえた場合とがある。

ト 底本で漢字書きせられている「左大殿」「主殿司官人ども」「世中」「御仏名朝」などは、それぞれ読みを示す仮名「ノ」を小字で加えて、「左ノ大殿」「主殿司ノ官人ども」「世ノ中」「御仏名ノ朝」のように記した。

チ 旧字体や異字体の漢字、当て字の漢字は通行の漢字に改めた。

リ 底本文の漢字書きの語に送り仮名の不足がある場合は、適宜補った。